

一乗谷朝倉氏遺跡

一乗小学校校舎改築に伴う事前調査報告書

1986

福井市教育委員会
朝倉氏遺跡資料館

目 次

はじめに

1. 遺跡の概要…………… 1
2. 調査の経過…………… 3
3. 遺 構…………… 4
4. 遺 物……………12
5. まとめ

例 言

1. この報告書は、昭和61年に実施した一乗小学校校舎改築に伴う事前調査の報告である。なお、一部、昭和50年の同校体育館改築に伴う事前調査の成果を含む。
2. この遺跡は、特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡と一連のものであることから、調査はこれを担当する福井県立朝倉氏遺跡資料館が実施した。
3. 発掘調査には、主として資料館の文化財調査員水野和雄・吉岡泰英・月輪泰があたり、実測図作成等に際しては、文化財調査員岩田隆・南洋一郎・佐藤圭がこれを助けた。
4. 報告書は、1・2・3・5を吉岡が、4を月輪が執筆し、吉岡が編集した。
5. 調査実施にあたっては、一乗小学校職員・市教育委員会を始めとする関係者はもとより、発掘や整理を担当した作業員から多大な理解と協力をいただいた。記して感謝する。

はじめに

一乗小学校の校舎の老朽化がすすみ改築することとなった。

改築する場所は、特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡の指定区域の外ではあるが、指定地の南端に近接し、心月寺跡とよばれる地域の北側端に位置している。

その為、工事前に発掘調査を実施することとした。

昭和50年の同校体育館改築の時の発掘調査では、調査面積も少なく、必ずしも遺跡の性格を明確にすることはできなかったが、朝倉氏時代の遺構がかなり良好にのこっていた。今度の改築場所が、それに接して南側を予定しているので、調査の結果が期待された。

最後に、この発掘調査及び報告書の作成について、県立朝倉氏遺跡資料館の全面的なご指導、ご援助をいただいたことに対し、記して感謝の意を表したい。

昭和62年3月

福井市教育委員会

教育長 池田健吾

1. 遺跡の概要

一乗谷朝倉氏遺跡は、戦国大名朝倉氏が5代約100年間(1471~1573)領国支配の拠点とした所であって、越前平野の東南部に位置し、九頭竜水系の足羽川の支流一乗谷川を作る谷地形を利用し、防禦を固めた城下町である。谷の入口と中程の2ヶ所に濠と土塁からなる上・下の城戸を設け、この内部は「城戸ノ内」と呼ばれ、町の中心をなし、ここには当主の館や家臣の屋敷・寺院・町屋等の跡が非常に良好に遺存しており、東の山稜上の山城等と共に1971年には、278haという広大な地域が国の特別史跡に指定されている。

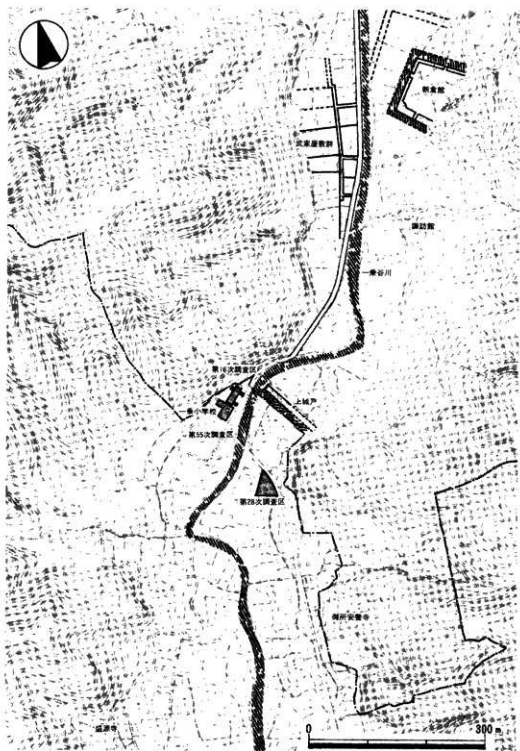
この遺跡は、1967年以来継続的な発掘調査が実施され、史跡公園化を旨とし順次整備されており、計画的に造られた戦国城下町一乗谷の姿が甦りつつある。これまでの調査によって第5代義景の住した館の様子や、土塁で区画された有力家臣の屋敷、そして寺院や多数の町屋と推定される小屋敷群が整然と配されていたことが明らかとなってきており、その調査結果は各界から注目されている。また、この一乗谷の町は、諸文献等から指定地「城戸ノ内」にとどまらず谷の奥地や谷地形を越えた周辺地域にまで及んでいたことが知られている。

今回の調査の対象となった一乗小学校の地は、指定境界となる「上城戸」の南に隣接し、西の山裾に所在する。その字名「心月寺」が示すように、このあたりには初代孝景が造営した一族の菩提寺ともいえる心月寺が存在したとされている。また、この上城戸は、城下町一乗谷の「表(おもて)」と伝えられ、南方の西の山稜の鞍部を越え、西の平野部へ通じる街道が設けられていたとされている。上城戸によって区切られた谷の奥地はかなりの広がりを持ち、土地改良事業等に際し多量の遺物が出土しており、第28次調査でも濠を持つ屋敷が確認されている。また、山裾を中心に、室町幕府最後の将軍となった義昭の居館と伝えられる「御所・安養寺」や近江浅井氏の居館跡や石仏で著名な「盛源寺」を始めとする多くの寺院跡が知られ、苔むした石塔・石仏も点在する。

このように、上城戸の奥地も指定地「城戸ノ内」におとらず重要な遺跡であって、これらの調査なくしては城下町一乗谷の全容を明らかにすることは不可能といっても過言ではなからう。



挿図-1 周辺全景

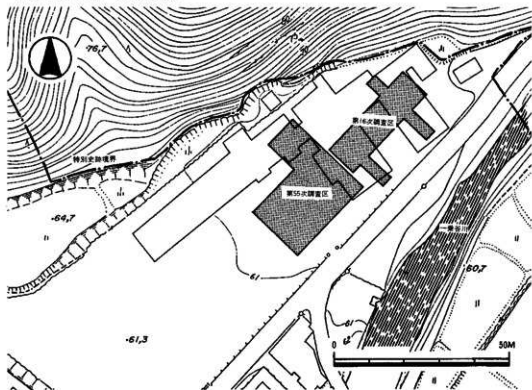


挿図-2 調査位置及概況

2. 調査の経過

福井市教育委員会は、老朽化した木造の一乗小学校校舎の改築を行うことを決定した。この小学校の敷地は、特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡に隣接しており、また、先の同校体育館改築工事に先立つ事前調査（第16次発掘調査、昭和50年）に際しては、現地表の約0.8m下層で道路跡とこれに面する屋敷跡等の朝倉氏時代の遺構が検出されている。今回の校舎建設予定地は、この体育館の南に位置することから、この地下にも当然、なんらかの遺構が存在することが予想された。

そこで、福井市教育委員会は、特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡の調査研究を実施している福井県立朝倉氏遺跡資料館等と協議し、同資料館の協力・指導のもとに事前調査を実施することとした。小学校の授業等の関係もあって、調査は、校舎予定地約580㎡に限定することとし、旧校舎の一部を取壊し、昭和61年4月28日から建設機械を用いてコンクリート基礎や後世の整地上等を調査員立合のもと慎重に除去し、同年5月2日から本格的に遺構検出を開始し、そして、約1ヶ月を要してその作業を終えた。その後、6月2日に記録用の遺構写真を撮影し、補足調査を実施後、6月5日から実測図作成作業を行い、同年6月15日に現場における一切の作業を終了し、山砂を用いて埋戻した。



挿図-3 調査区設定図

3. 遺 構

検出した主な遺構は、道路2、石組溝6、小土塁1、石列4、礎石建物1、井戸3、石積施設4等である。現地表から検出した遺構面までは約0.8mであって、その間に2～3回の整地層がみられる。朝倉氏時代の町が廃絶後は水田化し、その後小学校の敷地となったと推定される。遺構の保存は比較的良いが、東部は一乗谷川の流れによって削り取られ、西の山裾よりは後世の水田化の際に削平されている。

検出した遺構群は、大きく3期に分けることが出来る。これを下層からⅠ・Ⅱ・Ⅲ期と呼ぶこととする。Ⅰ期の遺構は深掘トレンチや、溝等の一部の検出にとどまり全容は明らかでないが、道路等を中心とする町割と一体のものである。Ⅲ期の遺構は、朝倉氏滅亡時(1573年頃)のものであるが、大半が削平されており、溝・小土塁等の一部が認められる。検出遺構の大半を占めるのが前記2期の中間に位置するⅡ期のものである。

以下、主要な遺構について概説する。なお、基準となる遺構の方位は、これらが地形等に支配されるため地図上の方位とは異なるが、ここでは、山裾側を西、上城戸側を北として記述することとする。

SS3280 発掘区中央を南北方向に走る道路である。Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ期を通じて存続したと推定され、この調査区の基準となる遺構の1つである。東は側溝S D3282、西は石列S V3289が境界であって、内法幅は約1.2m(4尺)である。道路面には小礫が敷きつめられている。東西方



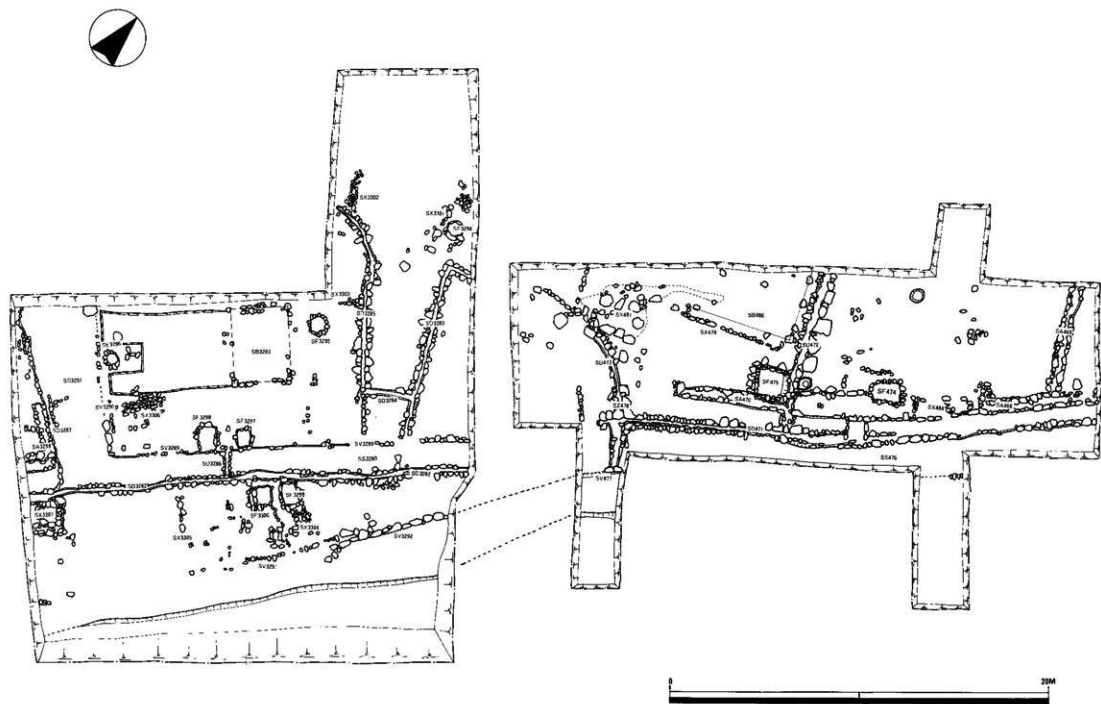
捕図-4 調査区全景 (東から)



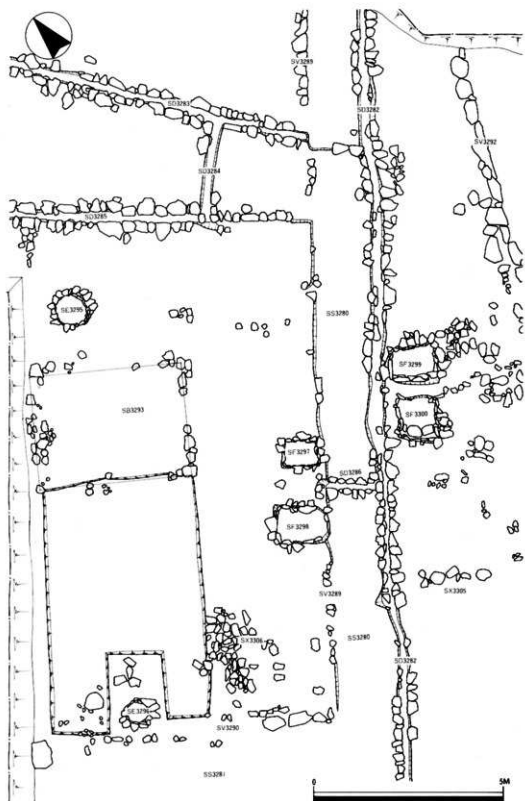
挿図-5 調査区全景（南東から）



挿図-6 主要部（南から）



挿図-7 遺構全測図



挿図-8 遺構主要部詳細図

向道路 S S 3281 と交差し、さらに南へ伸びている。北の第16次調査で検出されている南北方向道路 S S 476 と繋ると考えられる。

S S 3281 発掘区南端を東西方向に走る道路である。3期を通じて存在したと推定される。北は石列 S V 3290、南は小土塁 S A 3288 が境界であって、内法幅は約 3 m (10尺) である。道路面は砂利敷である。南北方向道路と交差し、東へ伸びていた可能性が強いが明らかでない。

S D 3282 南北方向道路 S S 3280 の側溝である。側石が抜き取られたり崩れたりした所も多い。内法幅は約 0.2 m である。南から北へ流れていたと推定される。検出した道路面の約 0.2 m 下層でこの溝と若干のずれを持ち、天端をそろえる側石列が存在しており、これが I 期の溝である。道路同様 3期を通じて存在したと推定される。

S D 3283 発掘区北端にみられる少し方位の異なる石組溝である。西で北へ折れている。内法幅は約 0.2 m である。第16次調査で検出されている溝 S D 473 と繋っていたと推定される。埋土の状態から考え、III期にはこの溝は廃棄され、南側の石列のみとなっていた可能性が強い。

S D 3285 東西方向の溝で、最上層から検出され、III期にも確実に存在した遺構である。内法幅は約 0.2 m である。II期、あるいは I 期、では西方で少し方向がずれていたようである。東は道路を横断し、側溝 S D 3282 に注いでいた可能性が考えられるが、後世の削平で明らかでない。また、S D 3284 を介して北の S D 3283 と繋っている。



挿図-9 道路 S S 3280、溝 S D 3282(南から)



挿図-10 溝 S D 3283, 3284, 3285(東から)

SA 3288 発掘区南端西寄に位置する東西方向の小土塁である。東端で南に折れていると推定される。Ⅱ・Ⅲ期の遺構であって、Ⅰ期には存在しなかったようである。幅は約0.6m(2尺)であって、屋敷を区画する土塼の基礎と推定される。またこの小土塁の道路側側には溝SD 3287が一部残存している。

SB 3293 発掘区中央西寄に位置する礎石建物である。Ⅰ・Ⅱ期の遺構である。後世の攪乱等もあって不明な点もあるが、東西約3.8m、南北約2.8mと推定される。礎石上面には柱痕跡や柱据付位置を示す「十」の刻線がみられるが、その間隔は一定せず、基準となる柱間寸法は明らかでない。道路から少し入った所に位置している。建物の性格等不明な点が多い。

SE 3294～3296 石積の井戸である。共に30cm前後の玉石を積み上げている。天端の内径は、SE 3294が0.75m、SE 3295が0.8m、SE 3296が0.55mである。この内SE 3295・3296の2基は底まで掘り下げ確認した。深さは前者が約2.5m、後者が約2.7mであり、共に下にゆくに従いすこしづつ径を増す。また、土台等はいらず、砂利層から直接積み上げている。

SF 3297～3300 方形に玉石を積んだ遺構であって、石積施設と称している。通常、各屋敷に1～2基存在しており、便所と推定されている。SF 3299とSF 3300の場合は同一屋敷内かどうか不明であるが、SF 3297とSF 3298の間には道路横断の溝SD 3286が存在し、井戸も左右にSE 3295・3296と2基存在すること等から考え、この2基の石積施設間に屋敷境があったと推定される。また、これらの屋敷の間口も小さく、面する道路幅も狭いことから考え、町屋と



挿図-11 礎石建物SB 3293他 (西から)

推定される。とすれば、これらの石積施設は便所と考えるのが妥当であろう。これらの規模は、東西、南北、深さの順に示せば、S F 3297は0.9m、0.7m、0.5m、S F 3298は、1.3m、0.9m、0.7m、S F 3299は、1.2m、0.8m、0.6m、S F 3300は、1.0m、1.0m、0.7mである。なお、S F 3300は当初は南北0.8mであったものを1.0mに拡張したようである。共にⅡ期あるいはⅢ期の遺構であろう。

なお、石列S V 3292は、後世の水田化時の畦畔石垣と思われる。石列S V 3291もこれと平行しており、後世のものであろう。この石列の約2m東以東は一乗谷川の流れによって大きくえぐられている。



挿図-12 井戸SE 3294(西から)



挿図-13 井戸SE 3295(南から)



挿図-14
石積施設S F 3297・
3298と溝S D 3286
(東から)

4. 遺 物

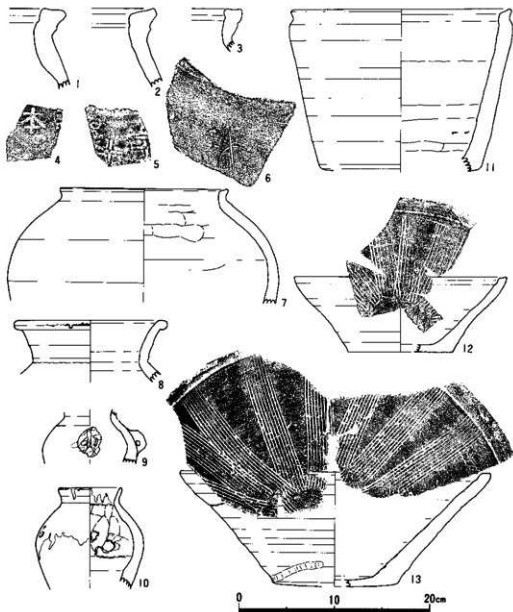
今回の調査で出土した遺物は総点数7,037を数える。内訳を見ると、陶磁器類が96.1%と大部分を占め、これに金属製品、石製品、木製品が伴う。陶磁器類では、日本の製品が95%を占める。なかでも土師質製品が81.1%と多く、次いで越前焼が11.2%と、この両者が大半を占める。これを除くと、中国製品の青磁・白磁・染付がやや多く、瀬戸・美濃焼、その他が続く。調査地は、城戸の外とはいえ城戸の隣接地である。そのためか、遺物構成の示す傾向は城戸内の調査結果に類似している。

越前焼 (第15図) 越前焼は裏・表・楕体などが出土した。(1・2)は肥厚した口縁の外側に段、内側に弱い段のつくⅣ群cの大甕である。(3)は口縁外側に凹線、内側に弱い段のつく中甕である。今回出

出土遺物一覧表

した裏にみられるスタンプは、総て(4)のような四字の「本」と格子目の組合せである。甕のうち(7)は、頸が短く、丸く膨らむ胴をもつ。良く焼き締まり、肩には自然釉がかかる。(8)は、頸が外反気味に立ち、口縁を丸くおさめる。丁寧な作りである。肩に(5・6)のようなヘラ記号をもつ例が数点出土した。(9)は小甕で、肩のやや下がった位置に耳をもつ。耳は粘土を貼りつけ形を整えたあと、図上左から右へ穿孔している。(10)はお歯黒甕である。よく焼き締まり、内面には鉄錆が付着している。鉢は(11)のほか、口縁が底

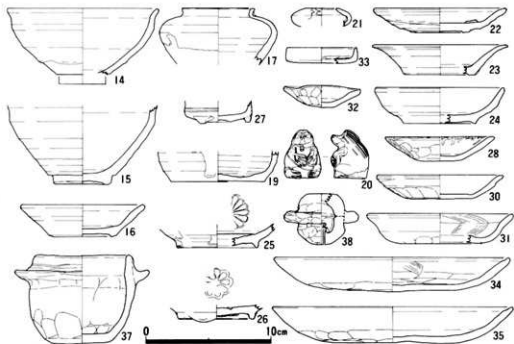
器 種			点数	%	器 種			点数	%	器 種			点数	%
前 風	甕	壺	334	10.8	中 國 製 陶 磁 器	青 磁	甕	74	1.7	金 属	銅 鏡	20	1.8	
		壺	90				甕	21			銅 釘	93		
		鉢	24				甕 伊	2			小 銅	2		
		漆 鉢	306				甕 小壺	4			銅	1		
		火 桶	2				鉢	4			その他	21		
		その他	1				壺	10			計	127		
		計	757				その他	3			銅 片	10		
		計	5,457				計	118			銅 片	49		
		上 部	壺				16	銅 部			3	基 材		11
		部	七 弁				7	部			70	銅 鏡		20
部	七 弁	1	杯	4	石	3								
部	十 玉	1	その他	1	玉 石	6								
部	その他	2	計	78	風 船	1								
部	計	5,684	計	78	伴 戸 物	3								
本 製	瓦 製	内 伊	2	磁 器	磁 器	甕	16	品	製	山	1			
		風 船	1			壺	47			オモリ	1			
		その他	5			杯	2			その他	4			
		計	8			鉢	1			計	109			
		計	8			その他	1			計	109			
陶 磁 器	甕	甕	39	新 製	新 製	計	67	水 木 品	製	漆 碗	2			
		壺	1			壺	2			漆 漆	1			
		小壺	15			壺 等	1			漆 漆	5			
		風 船	2			その他	2			刀	1			
		水 甕	2			計	5			ツナノ	9			
		水 甕	1			計	5			輪 轆 轆	1			
		鉢	1			計	5			加工 木	11			
		茶人 丸	1			計	5			炭 化 率	2			
		その他	2			計	5			枕	1			
		計	64			計	67			その他	1			
瓦 製	瓦 製	甕	3	新 製	新 製	壺	2	水 木 品	製	計	34			
		杯	34			壺	1			計	34			
		否 如	2			壺 等	1			計	34			
		壺	4			計	5			計	7			
		鉢	2			計	5			計	7			
その他	1	計	5	計	7									
計	46	計	5	計	7									
新 製	甕	甕	31	新 製	新 製	計	31	水 木 品	製	計	277			
		計	31			計	31			計	277			
小 計			6,410	小 計			350	小 計			7,037			



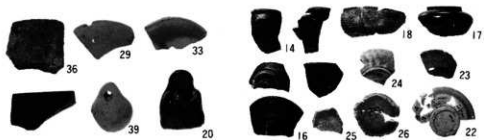
挿図-15 越前焼 1-4 甕、5-10 壺、11 鉢、12・13 楕鉢

部からゆるやかに、やや内湾気味に開くこね鉢なども出土した。楕鉢は、口縁をやや内傾して切り、楕目の密度の高い例が主体である。(12)は小振りの楕鉢で、口縁は内傾して切られる。楕目は口縁内面の凹線の下で止まり、見込には引かれない。(13)は口縁がほぼ水平で、内側に凹線がつく。楕目は部分的に凹線を越えて口縁まで引かれる。見込にも楕目が引かれる。楕鉢では、このほか口縁の断面が丸みを帯びた例が若干認められる。

瀬戸・美濃焼 (第16・17図) 鉄釉では、天目茶碗の割合が高い。(14・15)は口縁下のくびれが強く、高台は削り出しである。(15)は高台を丁寧に作るが、粗雑な例もある。口径は



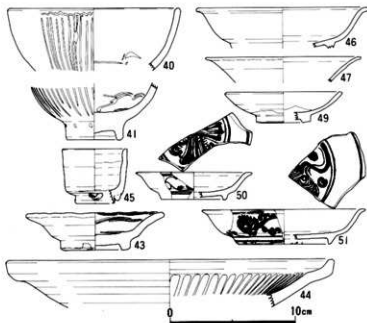
挿図-16 瀬戸・美濃焼、土師質土器 14・15 鉄釉碗、16 皿、17 茶入、19 瓶、20・21 水筒、22～26 灰釉皿、27 香炉、28・30～35 土師質皿、37 土釜、38 土鈴



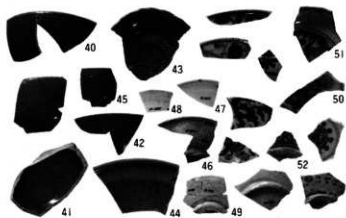
挿図-17 瀬戸・美濃焼、土師質土器、瓦質土器

12cm前後におさまる。(16)は碁笥底の底部から直線的に開く皿で、底部内外面にトチン板が残る。鉄釉の皿はこの1点のみ出土した。(17)は大海茶入、(18)は輪花の鉢、(20)は猿または狸を模した水滴である。灰釉では皿の割合が高い。(22)は腰折の皿で、高台は削り出す。(23)は碁笥底の皿で、畳付から外反して口縁に至る。(24)は胴部が内湾する例である。**土師質土器** (第16・17図) 皿が99.5%を占める。(28)はC類で、灯明皿として使用している。(29)は灯芯を固定するため、口縁の一部を削ってくぼみをつける。(30・31)はD類、(32)はF類、(33)はG類である。(34・35)は口径19cm前後の大皿で、2枚が重なって出土した。(34)は、粘土円板から手づくねで皿形に作り、見込を縦横にナデた後、見込の端から口縁にかけて器体を回しながら正方向にナデ、1周して逆方向にナデ抜く。(36)は金箔を押しした皿である。このほか土釜(37)、土鈴(38・39)、灯芯押さえなどが出土した。

中国製陶磁器 (第18・19図) 青磁碗は、線描蓮弁文碗が多い。(40)は、口径14cmを測る腰の張った見込の広いタイプの碗で、内面にも線描の文様を施す。(41)も同タイプで、中グリの浅い厚い作りの高台をもつ。見込中央に印花をもち、ヘラ描の文様を伴う。碗には、このほか無文の例もある。また(42)のように、弱い線描蓮弁文をもつ例が若干出土した。青磁皿は、ほとんどが桜花皿である。(43)は口径9cmを測る。胴が腰折で口縁に向かい緩く外反する。内面は口縁に沿って3条単位の弧線を引く。見込中央の釉が掻き取られる。(44)は口径24cmを測る盤で、稜や鍋部は丸く鋭さが無い。(45)は口径5cmの小振りの香炉で、高台が発達し、脚が形骸化している。白磁では皿が多い。(46)に見られる端反りの皿C群が主体である。(48)は、高台脇に段をもたず、疊付から外反して口縁に至る。(49)はB群の皿で、(48)とともに数個体が出土した。染付も皿が多く、高台をもつ端反り皿B₁群が主体である。(50)は同群VI類の皿である。



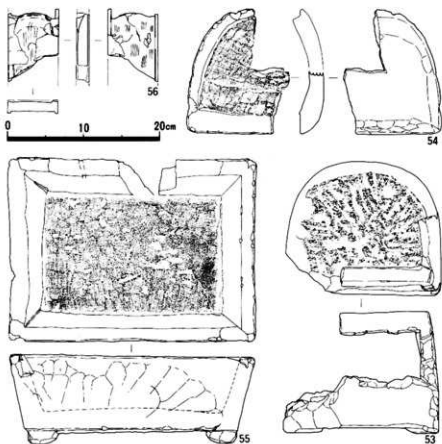
挿図-18 中国製陶磁器 40・41 青磁碗、43 皿、44 盤、45 香炉、
46・47・49 白磁皿、50・51 染付皿



挿図-19 中国製陶磁器

発達し、脚が形骸化している。白磁では皿が多い。(46)に見られる端反りの皿C群が主体である。(48)は、高台脇に段をもたず、疊付から外反して口縁に至る。(49)はB群の皿で、(48)とともに数個体が出土した。染付も皿が多く、高台をもつ端反り皿B₁群が主体である。(50)は同群VI類の皿である。口径9.4cmで、胴部表面には唐草文、見込には十字花文が描かれる。

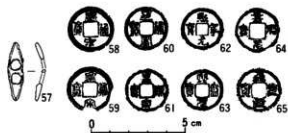
(51)は同群類の皿である。口径13.1cmで、胴部表面には牡丹唐草文、見込には玉取獅子が描かれる。(52)は同群類の皿で、胴部表面に渦状の密な唐草文、内面にアラベスクの文様が描かれる。



挿図-20 石製品 53 バンドコ(身)、54 同(蓋)、56 石硯

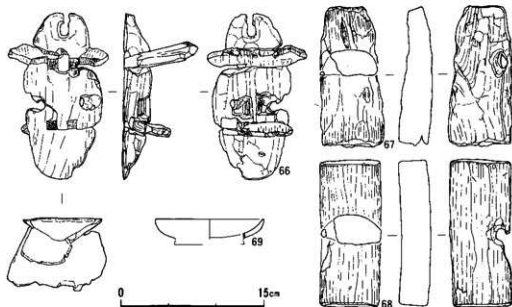


挿図-21 石製盤



挿図-22 金属製品 57 鉄、58-65 銅銭

石製品 (第20・21図) 石製品では、バンドコ(行火)の割合が高い。バンドコは全て笏谷石(緑色凝灰岩系)の製品である。(53・54)は身と蓋のセットで、井戸SE3296から出土した。平面形はD字形を呈し、身の前面の窓は四窓と思える。蓋の表面は丁寧に調整してある。(55)は同じ井戸から出土した方形の盤である。笏谷石製で、器面調整は内面に比べ底面の方がやや粗い。底部四隅に削り出しの脚がつく。同井戸からは、円形の盤、茶臼、井戸杵なども出土した。(56)は石硯である。外形が長方形で、側面が垂直に立つB型の長方硯である。表



挿図-23 木製品 66 下駄、67・68 ツチノコ、69 漆皿

裏面を加工し使用している。片面は内面楕円形のⅢBcタイプ、反面は内面方形のⅠBcタイプである。両面における加工・使用の先後関係は不明である。

金属製品 (第22図) 金属製品では釘類の割合が高い。(57)は幹で、一枚が出土した。銅銭は20枚が出土した。(58~61)は「皇宋通宝」、(62・63)は「熙寧元宝」、(64)は「嘉祐元宝」、(65)は「天聖元宝」である。

木製品 (第23図) 木製品は、大部分が井戸SE3296から出土した。(66)は長円形の台に、榫の広がる歯の付く露卯下駄である。台の最大幅は中央横緒付近にある。断面形は三角形で、台裏は四隅を丸く、稜を残さずに削る。緒穴は、はじめ裏面から四角く削り込み、次に表面から丸く削り貫通させる。(67・68)は、蓆などを編む紐を巻き付ける木製のおもりのツチノコである。長辺は15cm前後を測る。広葉樹の材料を適当な長さに切り、これを半裁し、図のように中央端よりに一箇所、両面から丸く紐穴を穿つ。丸い面は加工痕は無く、半断面も裁断以外特に加工はない。このほか、同井戸から漆碗の底部、同皿片、箸などが出土した。

調査の結果、①出土した遺物は、城内出土遺物と全く同じで、器種構成も類似している。

②越前焼においては、16世紀後半の製品が主体を占める、等が明らかになった。

註 1. 『泉道精江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書、1983の大発分類による。

2. 『朝倉氏遺跡発掘調査報告書Ⅰ』1979の分類による。

3. 白磁・染付皿の分類は「15~16世紀の染付碗・皿の分類と年代 貿易陶磁研究No 2小野1982による。

4. 『日本石硯考—出土品を中心として—』考古学雑誌70-4水野1985による。

5. 下駄の論考には、最近「中世遺跡出土の下駄」朝倉氏遺跡資料編紀要岩田1985がある。

5. ま と め

今回の調査によって明らかとなった点を簡単にまとめてみよう。

この一乗小学校の位置するこの地区は、南東の一乗滝・浄教寺から流れ出る一乗谷川の本流が南の鹿俣から流れる支流を加え、その行方をさえぎる西の山稜の突出部によって大きくその方向を変える地点であって、上城戸の外方に位置し、地形的条件もあまり良好とはいえない。しかし、ここにも朝倉氏時代の城下町一乗谷の一部は明白に存在した。検出された遺構をみてみると、先に述べたような自然条件や後世の削平等によって一部に破壊はみられるものの、南北方向の小路とこれに面し土塁を持つ屋敷や町隈と考えられる小規模の屋敷が計画的に配されている。これらの遺構は、大きく3期に区分されるが、これらは、出土遺物等から判断して朝倉氏時代の後半に位置すると考えられる。

最後に、若干の推論をまじえまとめてみると、この地区は、朝倉氏時代後半の、町の発展に伴って、自然的条件の悪いこの場所を開発した所といえよう。今後は、字名にみられる「心月寺」や、この地区一帯の集落の名「西新町」等を念頭におきながら、こうした城戸の外の各地の調査数を増し、一乗谷の町の構成や発展の実態にせまることが必要であろう。

一乗谷朝倉氏遺跡

一乗小学校校舎改築に伴う事前調査報告書

1987年3月31日

編集 福井県立朝倉氏遺跡資料館
発行 福井市教育委員会
印刷 河和田屋印刷株式会社
